
お金で、僕は幻想の、彼女は現実の青春を買う。

kou ∞

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

お金で、僕は幻想の、彼女は現実の青春を買う。

【Nコード】

N0637T

【作者名】

kou_∞

【あらすじ】

高校に入学した。

彼女に出会った。

でも、僕には理想がある。

現実世界にはいないだろう理想がある。

なのに。

この気持ちは、、？

サクサクと読めると思います
よろしくお願いいたします

僕、高校生になる。（前書き）

ゆっくり更新です。

感想などお待ちしております。

誤字脱字ありますがなんとなくでつかんでください。

僕、高校生になる。

春。

高校生に上がるからといってもなんら気持ちが高まるわけでも中学校にノスタルジックな感情を持つわけでもない。

リアル
三元にそんなのは不必要だ。

いないよ。

はあ早く、早く帰りたい！

「お前高一の最初の日は何考えてんだ？」

隣から、こそこそ話をしたいらしいタニグチトウタの声があった。

「勿論、世界の平和を願っていたんだ。」

僕は笑顔でそう応える。

「嘘ついてんじゃないよ。」

「嘘なんかついてないよ。」

当たり前です。

世界平和はみんなの望みだ。

この日は、入学式だけだった。

午後からはフリーだが

僕にはやるべきことがある

「今日、一緒に秋葉行かないかい？」

トウタが問う。

「なんだよ。お前高校生になったらそついつのやめるんじゃないの

かよ？」

「そんなお前の幻想をぶっ壊す！」

「お前ってそんな熱血キャラだったんだな。」

しかも意味解らないし。

幻想って、、

お前さんが言った言葉だろうがい

「僕は今日用事があるからまた今度ね。」

「つれねえなあ。」

二つあるんだ。

一つは別に大切な用事じゃないけど。

「つーか、トウタも来てよ」

「なるほど、」

「そんなに露骨に怒るなよ」

「あんたバカア？不愉快なだけだ。」

「そうかい。と返す。」

「なんだかんたついてきてくれるのがトウタだ。」

「一目惚れしました！付き合ってください！」

今日だけで6人が、、

「僕、君の事を知らないから、まずは友達からでいいかな？」

この言葉も6回目か、、

ありがたいんだけど。

迷惑も付いてくる。

今、興味ないんだ。

「有り難う」

「お前さあ、中学校の時もアレがバレなければモテモテだったんだよな？」

「わかんないよ。」

きつと高校生になって心が浮かれていたんだろうね。

だから簡単に告白したんだろう。

「あと一つってなんだよ。」

「いやいや別になんでもないよ」

読書だ。読書。

10冊。

買いすぎたかなとはちょっと思ったけど。

まあ好きだからいいや。

桜が咲くこの道を歩く。

「綺麗だな。」

この世界にもこんな綺麗な物があるんだよな。

僕が、、間違っているのか？

いやそんなはずはない

「じゃあな」

「うん、じゃあね」

トウタと別れ、自分の家へ帰る。

「ただいま、、レイちゃん」

どんなにモテようが

僕はオタクだ。

三次元の女子には無い、全てを優しく包み込む彼女たち

三次元の男子には無い、全てを乗り越える彼らたち

最高じゃないか。

ライトノベライズの中での学園生活が僕にとって望む青春なんだ。

とある主人公じゃないけど

幻想をぶっ壊された。

僕、彼女と出逢う。

翌日。

今日から高校生活が始まる。

僕は期待はしてない。

期待をするのはいけないことだから。

「レイちゃん行ってくるよ。」

うん、やっぱりレイちゃんが一番だ。

いないかなあ。

いるわけないさ。

初めて、、、というか昨日あってるはずなんだけど

初めて会う人々とクラスメイトになるわけだ。

ほとんどクラスメイト止まりだろう。

親しくする必要はないんだ。

何故なら。なんていらないだろう。

トウタ以外には要らない

もとは一人でも良かったんだ。

ただトウタと趣味が合って、気が合ったから友達としてここに
いるんだ。

家族がいなくてところもだ。

ただ一つ違うことがある

「絶対アスカだ！」

「レイだよ！」

アスカかレイか。

僕はレイ派だ。

断固レイ派だ

「なんだよ。あのツンデレ。ツンデレとか絶対後々ウザくなるよ。」

「お前がウゼーよ。なんだよあの感情を露にしないキャラのどこが
いいんだよ！」

「わかってないなあ。ポカポカするって最高の名言だろう」

「あんたバカア？ヤンデレじゃねえか」

時々アスカの名言を放り込んでくるのが腹立つ。

「ヤンデレとか言ってるじゃねえ！」

グー！

「馬鹿ヤロー！なんで殴るんだ！」

当然の報いだ。

バカ野郎！

レイちゃんはヤンデレなんかじゃねえ

「というか僕ら同じクラスだね」

「四年間オナクラだな」

「オナクラってなんだよ。いやらしく聞こえるからやめて」

「エロく聞こえるのは自分のせいだろ」

「意味わからんよ」

「エロいのはお前がそういうこと考えてるからだろ？」

はあ。

いやいや、まあいーや

「そうかもね。」

「なんだよ。あつさりだな」

「まあね。ほら担任らしき人が来たよ」

「らしきってなんだよ絶対担任だろ。知らないやつとかあり得ないだろ」

「あり得ないことはあり得ない」

「グリード様みたいなことを言うなあ。」

「まあいいから。」

初めてのLHR
ロングホームルーム

一人ずつ紹介してしていく。

自分の名前

出身校

趣味

特技

みんなへ一言

至って普通だ。

「タニグチトウタです。滝村西中出身で、趣味は読書。特技は機械いじりです。これからよろしくお願いいたします！仲良くしてやってください。」

嘘はついてないなあ。

読書＝ラノベと萌え系の本

で

機械いじり＝ゲーム、パソコンの改造

なのだから。

段々と僕の番が近付く。

前の奴が立ち上がり、明らかに嘘だろう的な特技を言い放つ。

どこでも寝れるってどんな危機感の無さだよ。

じゃ取り敢えず、ゲイバーで寝てこい。

僕か、、、

実際嫌なんだよな名前言うの。

「ワカイサクラです。」

ざわざわする。

サクラと言う女の子みたいな名前に対してだろう。

気にしない。フリをする。

「滝村西中出身、趣味はギター、特技と言えるものはありません。よろしくお願い、、、します」

僕も嘘をつくこと無く、着席した。

トウタの冷ややかな視線を受けながら、、

次は女子だった。

顔と名前を覚えていないと痛い目に会うので、一応確認する。

昨日、僕に告白してきた子が二人ほどいた。

僕は罪悪感に苛まれる。

バツと何人目かの女子が立った。

僕は目を奪われた。

綾波、長門、戦場ヶ原、藤和、秀吉

それに匹敵するような端正な顔立ちとクールなオーラ

可愛く美人だった。

「ハナダリン、田無中出身、趣味は天体観測で、特技は絵を書くことだ、よろしく」

これは妄想

これは見かけ倒しなのだ。

三次元にそんな萌える子はいない。

そうだ。 そうなんだ。

あれもキャラクターを作っているのだろう。

二次元への侮辱だ。

今の世界はそうなんだ。

それが最初の出逢いで最初の印象だった。

僕、高校生活を体験する。

午前はテストだけだった。

終わったかあ。

僕は普通の成績だ。

出来は上々。

昼休み。

「ワカイくん。お昼一緒に食べない？」

なんて積極的なんだ。

女子とお昼なんて、、

いや、まあ中学の時も隣席する6人ずつでグループで食べることに
なっていたから別に何も変わりはないんだけど、、

5対2って、、

トウタ、、、ニコニコながらいいよとか言ってるんじゃないよ！

トウタは中学時代もオタクという事はバレてなかった。

僕は、、

いやいい。話したくない。

まあ食事くらいいいか。

と一緒に食べる事にした。

「サクラくんって意外と面白いんだね」

不意にそんなことを言われた。

内容を全く思い出せない。

ケラケラ笑うのを見れば面白いことを言ったんだろう。

心ここに在らずだ。

さっきからキタムレイを眺めている

沢山の男子からのアプローチを受けている。

あわわわ、、という感じでオーバーヒートしているという感じ。

可愛いらしく愛らしい。

しかし、なかなか本性を出さないなあ

「サク、これくれよ。」

「やめろよ！だいたいお前、僕が作ったものの不味すぎて食べないって何時も言っじゃないか。」

「えっ、ワカイくんって自分で作ってんの！？」

「う、うん。一人暮らしだからね。」

「マジ！？いいなあ」

「一人暮らしって寂しいよ。まあ、小学生の時に両親亡くしてそれからほぼ一人暮らしだから寂しいってのは無いけどね」

「、、、、ゴメン。」

深刻そうに女子が謝る。

「いやいや。別に気にしてないよ。なんだかんだ楽だもん。トウタも両親亡くしてるもんね」

「ああ。祖父母に育ててもらってる。」

「二人ってカッコいいね。」

「」「へ？」「」

「いやなんか、強い人間だなあって」

まあ人間強度は強いだろうなあ

阿良々木くんじゃないけど友達も少ないし。

「ありがとう。」

「いや、別にお礼言われるようなことじゃ、、、」

コグレさんか、、、覚えておこう。

「ってことでサク、頂くぜ。」

「あつ！、、、バカ野郎。」

グー

「痛っ！酷いな、たかが唐揚げ一つで！」

「食べ物への恨みは怖いんだよ。」

「まあ、今回は旨かったな。」

「なんだよ、気持ち悪いよ。僕らはカップルだよ。嫌だよお前の彼女って設定すら嫌だよ。」

「酷く傷付くなあ、おい。唐揚げのパワーってなんなんだよ。」

ケラケラと女子が笑う。

そんな感じで僕の高校初の昼休みは終わった。

キタムラレイは男子10人に囲まれて気まずそうに弁当を食べきれずにいた。

顔を真っ赤にしながら。

なんだよ、、、と小さく呟いた。

僕がだけど。

さて、掃除時間。

何も特にない15分間。

知らない人とトイレ掃除の気まずいクォーター

コナンくんもさすがにこのクォーターは切り抜けられないだろう

まあ僕は気にしない。

「お前って女子からモテるな」

えっとタシロくんだけ？

「モテないよ。ただそんな風に見えるだけだよ。」

「お前顔が整ってるしな。」

「そうなのかな？解らないけどありがとう。」

「褒めてねえよ！リア充！」

「初対面の人間にそんなこというなよ！君はまさかボツチダンサーか？」

「痴音みたいに言っちなよ！」

「まさか知っているとは思わなかった。」

「知ってるよ。俺、ニコニコ動画好きだもん」

「ニコ厨ってやつだね」

厨って言葉嫌いだけど。

「まあそういうことだ。」

「じゃまあよろしく」

手を出す。

握手のサインだ。

しかし彼は

「友達とは作らない主義なんだ。人間強度が下がるから。」

「どこの阿良々木くんだよっ！」

「お前とは気が合いそうだなあ。いここ。」

「きつと君が初めてだよ。阿良々木さんから藤和エリオにキャラチ
エンジしたのは！」

「やりおるなお主。」

「それが忍意識だったら疲れるけどな。」

新しい友達が出来た。

らしい、、

午後。

レクリエーション。

部活勧誘やその他もろもろ。

部活に入る気なんてないんだけどなあ。

キタムラレイは先輩方がやる芸に手を叩いてニコニコしていた。

大笑いする回りの女子のとは違う笑い方。

いやいや、、僕はなんですつと見てるんだ。

ただのクラスメイトだろう？

僕の嫁は綾波だけ、、ってかなり痛いなあ。

「サク、帰ろうぜ。」

「ああ。」

桜並木。

パラパラと落ちる桜。

「んじゃさよなら」

「さよならなんて悲しいこと言っなよ。」

トウタ面倒くさっ。

まあスルーして帰る。

川沿いの並木道を。

まあ未来ってのはどうなるかわからないから楽しいって言うけど

未来を知って、改善をするほうが楽しいと思う。

いや、別にこの先の展開になんの関係も無いのだけれど。

僕、彼女と話す。（前書き）

感染性胃腸炎が治りません。

僕、彼女と話す。

川沿いというのはいろいろなモノが目につく。

缶、ペットボトルなどのゴミ

歩く老人

走る小学生

溺れている犬

それを助けようとするキタムラレイ

自力で岸に上がる犬

そして、溺れているキタムラレイ

まあなんて、冗談っぽく話したけど一大事だ。

「だ、大丈夫ですか!？」

僕は制服を脱ぎながら川に向かう。

いや、、でもこの川、浅いはず、、

キタムラレイに近付き僕は

「大丈夫ですか？」

僕の腰の辺りまでしかない場所でどうして溺れているのかなあ？

そんな風に手を差し伸べた。

「ありやうや？」

僕の手を握りしめそんなことを言いながら立ち上がった。

「これをどうぞ」

岸に上がりバックからタオルを出し渡した。

「あ、有り難うございます！ーワカイくん。」

「覚えてくれていたとは、、まさかでしたね。」

「え、ご、ごめんなさい！勝手に覚えちゃって」

「い、いやいや。嬉しいですよ！」

「ワカイくん、女子からモテるし、、」

「いや全然ですよ、、」

今まで、単に話し掛けられていただけだ。

話しやすいオーラでもでてるのだろうか？

「わ、私、ワカイくんに何か悪いことしましたかね！？」

泣きそうな顔で、大きな瞳で僕を見る

「い、いや別に、、、、どうしてですか？」

「私のこと何時も怖い顔で見てるから、、、、」

気付かれてたっ！？

ヤベー恥ずかしい。

穴があつたら入りたい。

「怖い顔は素からだよ」

笑顔で言つて場を和ませようとする。

「あと、それです。私が言いたいのに！」

「えっ！？」

「ワカイクんって笑わないんです！それも作り笑いってバレバレで

す！」

、、

笑ってない？

言われて見れば、僕の人生他人と話して笑ったことが、、

ないかもしれない。

「うーん。言われて見ればそうかも、、なんたる笑い方がわからないんだよね」

「面白かったら自然に笑いはでるのです。」

「まあ笑顔を見せたく無いっていうA、、ええと心のバリアがあるのかも。」

A「フィールドなんていつてしまえば、また中学時代みたいになる。

あれはやりづらい

「所謂ATフィールドみたいなモノですね。」

お前が言っんかい！

とツツコミたくなる衝動を抑えて

「ATフィールドって何？」

と言ってみる。

「心のバリアです！エヴァンゲリオン、、、綾波レイとか知りません？」

「うん。知ってるよ」

「あれに出てくる単語で、、、ああ、、、女なのにエヴァンゲリオンとか見てるっておかしいですか？」

「うーん、、、おかしくないよ」

「嘘に聞こえます!」

「さて帰りましょうか」

「誤魔化さないでください。」

「さて帰って風呂に入らなきゃ。だって、」

「?」

「風呂は命の洗濯よ。でしょ?」

「そうで、、ATフィールド知らないって嘘つきましたね!」

顔を真っ赤にして怒る彼女。

羞恥心のほうが強いらしい。

たかがミサトさんの名言を言ったぐらいで、、

「ははっ」

不意に僕は笑った。

「笑った、、」

大きな目をくりくりとさせながら驚いた顔で僕を見る

「は？」

「笑いましたあ！」

笑顔で言う。

ああなるほど。

「僕も笑う時は笑うさ。そんな驚かなくても、、」

「なんか皆の知らないワカイくんを一足先に知ったという優越感ですね！」

「くくく、下らなっ！ははは！」

なんだよそれー！！

「なんで笑うんですか！」

「いやいや。面白くなって」

っ！か笑つとこ見れて喜んでたのに今度は怒るし。

わけのわからない人だ。

「面白い、、ですか？」

「うん。よしそろそろ帰ろっ。」

「はい。そうですね。」

立ち上がり、鞆を拾い上げさよならと言おうとする。

というか冷静に考えたら途中からタメ語になってたな。

まっ、いつか。

「んじゃ。気をつけて」

自宅に向けて歩き出す

「また明日、、、あっ！」

この「あっ！」は、、

いやいや変な想像をするな。

いや、、でも、このパターンはよくラノベで読むじゃないか！

いやいや、しかしなあ

まあ現実任せよう。

「なんで私を怖い顔で見つめていたのか聞いてません！」

ガクッ

少しでも期待した僕がバカだった。

恥ずかしい思いをした。

「理由は自分でもわからないんだ。ごめんなさい。」

「そうですか、、あと私と友達になってももらえませんか？」

不意に放たれたその言葉。

それをしっかりと脳で受け取ったか解らない早さで僕は

「もちろん」

と答えていた。

僕、彼女の家に行く。

僕はよく友達というものを知らない。

いや、知っているのだけれど

それはあくまでも小説の中。

言葉の中。

頭の中。

だけなのだ。

トウタは友人が沢山いたが僕と接する時は対応が違う。

それが裏か表か。

考えたらなんか寂しくなりそうなので考えないようにしてる。

これだろう阿良々木くんが言っていたのは。

人間強度が下がっている。

孤独感を無くせる変わりに恐怖感を得る。

等価交換なんだ。

だから、僕がああ瞬間に「もちろん」と言った時点でいろんな覚悟と戦わないといけなくなったのだ。

これから一生を掛けて、駆けて、賭けて、翔て。

こんな話してるんだけど、、

混乱してます。

いやあ、、なんでことになってしまったのかなあ

「ここが我が家です！」

「いやいや、、なんで友達になって即日、そしてずぶ濡れの状態で家に招待!?!」

初めて女の子の家。

けど、、ここは僕らと同じ小、中学の圏内じゃ?

まあ、この家の大きさから私立のお嬢様学校に行ったかも知れない
つてのは容易に考えつく。

「ただいま。」

「ぼ、僕やつぱり帰るよ」

「な、なんでですか!?!」

「出会って一日の男の子家に呼ばないよ普通。」

「そうですかね、、?」

首を傾げ全然解らないという表情を浮かべるキタムラレイ。

僕もよく解らないのだけれど、、

現実ではそうじゃないのかな？

「ラノベでは普通によんでましたけど？」

「ラノベと現実世界は違うよ。」

この瞬間に気まずい空気が流れた。

二人の間に切り裂きたい空間が出来た。

それは何かを言うだけで切り裂けたはず、だけれど切り裂いたのは僕でも、彼女でも、はたまたそういう「必要」な言葉でもなく

「お帰りなさい！あら？彼氏？友達？まあいらっしやい」

と泣き出す彼女の母親の言葉だった。

「ちょ、お母さん、、、なんでいきなり泣き出すのよ?」

「だってレイちゃんが、、き、今日は赤飯ね。あなたお名前は?」

「あつ、、、えっとワカイサクラです。」

「サクラくん!よろしくね!」

無理矢理握手された。

40後半くらいか。妥当だろう。

「おとーさん、レイちゃんが彼氏連れて帰ってきたわよ!」

「違うよ!友達だよ!友達!」

僕無言。

顔が真っ赤だったことは間違いないだろう。

「んで、なんであなたたちずぶ濡れなの？」

急に冷淡に問い質してきた。

恥ずかしそうにキタムラレイは経緯を話した。

「あら、そう。ならレイは上に入ってきてなさい。」

「サクラくんはこっち」

誘われるままについていく。

デカイ風呂だなあ。

、、、、ってことはこの家庭は風呂が二つあるのか、、、、？

なんていう金持ち家庭なんだ。

気取ったところが無いのは何故だろう。

演技、、、

まあそこは気にしないでおう

悲しくなるから。

シャワーを浴びていると扉の向こうから

「下着は乾いたんだけど、制服が乾かなかったからお父さんの服置いて置くわね」

という声が聞こえてきた。

「あっありがとうございます。」

「後ね、、、もうひとつだけ、、、」

「はい？」

「多分、レイ、あなたに、きつと凄いことを、言う、だろうけど、出来れば、出来ればでいいの、離れないであげて」

出来れば離れないであげて。しかうまく聞こえなかったけれど

大体、この重い空気で理解できた。

「はい。」

一応そんな風に返して置くべきだと思った。

シャワーをあがり、置いてあつた浴衣を着、

浴衣！？

まさかの浴衣！？

えっ何？おとうさん、野比のび助ですか！？

テンパリ過ぎてよく解らないツッコミをしてしまった！

一応、着て廊下にでる。

「ワカイくん！こっちです！」

「う、うん。」

「制服が乾くまで待ってくださいね」

笑顔で案内された彼女の部屋。

それは。

ピンク基調で

いい匂いがして

凄くきれいで

クマやパンダのぬいぐるみが置いてあって

本の並びとかあいっえお順にしてあって

あー兎に角もう！凄く可愛い！

ヤバイ。

これが女の子部屋なのかつ！？

一瞬天国かと思っただぜ。

っていう理想をぶち壊しにしてくれる

えっ？今まで埃一つ落ちてなかったのにどうした？

どこでもドアで飛ばされた？

ってくらいに散らかったた。

いや荒らされてた。

ウルリケ・オッティンガー監督の映画のようにフリークスたちが奇

怪なことをしたみたいだ

「どこの神原駿河の部屋だよ。」

小さく呟いた。

「そ、そんなに酷いですか？」

聞こえてた。

「おい神原。」

「いえ、キタムラです。」

「僕に掃除する時間をくれ。」

「ええー！？」

「じゃせめて他の部屋にチェンジで。」

「ええー!？」

こんなに広い家でもかよ。

とツツコミをいれるどころかシャウトしたくなる。

僕もキャラクターチェンジが激しいなあ。

「座るとこないじゃん。つかこの本共、BLじゃないよね？」

なんか全部にブックカバーついてるけど。

「ち、違いますよ!」

「ふむふむ」

手にとり中をみる。

ああ。思考も嗜好も同じだ。

「これ持つてる。」

きつとキタムラレイの母親が言っていたのはこのことだろう。

普通ならひくもんなあ。

僕も身をもって経験してる

「あのさ。僕もこういう趣味あるから、大丈夫だけど、他の人にあんまり教えないほうがいいよ。」

「そうですね。」

「ってことで片付けようよ」

「あ、あの、あ、あと一つ。」

この、あと一つ。は大きな大きな一つだった。

彼女、秘密を話す。

「まあ、、、あと一つは片付けてからで。」

「え？」

「汚いと落ち着かないでしょ。僕が」

はははと頭を書きながら言った。

下着も落ちてんだもん。

ピンクの。

無理だ。理性を保つの。

「さっ。片付けよう。」

「は、はい。」

「ねえキタムラさん。」

「おかーさん！なんか、ワカイくんが話があゝゝ、」

「おい！この距離で君以外のキタムラさんに話かけると思っんで
すかコノヤロー！」

「戦場ヶ原さんネタだったんですが。」

「ネタだとわかっていても全力でやってしまったらもう脅迫だよ。」

「ごめんなさい。」

「いいんだけどゝゝ、レイさん。」

ああレイさんいつちゃった。

綾波のレイちゃんになんて言えばいいんだ。

「何ですか？」

「本棚は？」

「あれです。」

「組み立ててすらいなんだね、、」

組み立てる。カラーボックスの棚

机(?)の横にスペースを作り、組み立てたのを置き、大量の本を並べていく。

ブックカバーは本の題名ごとに色が変わっていたので簡単に片付けられた。

本を片付てたら、段々足下が見えるようになってきた。

左手で並べながら、右手で次の本をあさる。

ひときわでかく固い物が手に触れたので見てみる。

僕の学校の卒業アルバム。

しかし、10年前だ。

「お姉ちゃんでもいるの？」

「いえ、一人っ子です。」

、、？

「あ、あの、、それ私のです。」

「は？」

この世界には僕の知らないことばかりだ。

知識が無いことに嘆いてしまう。

常に人間は科学、非科学の迷宮で迷う。

「私、25歳なんです。」

なんて言葉を聞いたときそんな事を思った。

「僕、15歳なんだけど。」

「知ってます。」

理解出来ず僕はあははと笑いながら本を並べる。

「あの、、、こっち向いてください。」

「うん。」

後ろを向きながら正座をする。

「畏まらなくても、、、、」

「真面目な話なんですよ?。」

きっと僕をからかっているのだ。

お姉ちゃんのやつなんだろう。

だから僕も最初は信じたフリをしなきゃな

「ええ。」

よし。と聞くことにした。

25歳にどんな理由とオチがあるのだろうか。

「私は10年前に病気を患いました。

「中学三年生の時に体調を崩し入院したら医者に『成長が止まっている』と言われたんです。

「それから闘病生活です。インフルエンザのような状態で9年間。

「毎日、、、何も出来なくて、ただ本を読んだり、アニメや映画を見たり。

「見ればみるほど病気のせいで高校に行けなかったことが悲しくな
って、、」

「成長は未だにしないですが、体調は頗る良くなり、普段の生活に
支障が無くなりました。」

「私は病院の先生に聞き、両親に頼み高校に行くことにしました。」

「そっかそれは大変だったね、、」

リアリティーがある話だった。

「私は25歳です。それでも、私と仲良くしてくれますか?」

「もちろんだよ」

ユーモアがある人なんだなあ。

「よ、良かった、、」

泣き出すキタムラレイ。

えっえっ！？

まさか、、

アルバムをペラペラとめくる。

いた。目の前にいる彼女が10年前のアルバムにいた。

僕は混乱している。

本当に25歳？

でも病気だった。

時が止まっていた。

僕はそんな勝手な解釈をした。

僕、困惑する

「あの、、、レイさん？」

「はい、、、」

泣きながらこっちを見る。

「僕を茶化しているわけじゃないんだね？」

「当たり前です。」

「僕は何歳だろうが気にしないよ。」

何故だろう。

彼女を抱き締めたい。

「嬉しいです。ありがとうございます！」

出会って初日。

何故こんな風になってしまったのだろう。

友達を作るというために、彼女は嬉し涙を流しているのだろう。

「しかし、僕らは出会って初日！さあ元氣出して。お互いのことを紹介しなくちゃ。」

「えっ？」

「僕はワカイサクラ。両親を事故で亡くして今は一人暮らししてるよ。趣味はギターとラノベとかアニメ見ること。特技は料理。好きな食べ物肉じゃがだね。こんな僕だけどよろしく。」

「ありがとうございます、」

「ほら君も自己紹介して。」

「私はキタムレイです。25歳です。趣味は読書と映画を見ることが。特技は絵を書くことです。歳上だけどよろしくお願いいたします！」

号泣。

ありがとうございますの連呼。

怖かったんだろう。

10歳上の自分に友達が出来るか？

ドン引かれるんじゃないか？

「だけど、10歳年上って言うのは僕にだけの秘密にして。」

「えっ!？」

「お願い。」

「わかりました。」

僕は、何歳上だろうが気にしない。

とくに理由は無いけど、、

でも、僕みたいな人間ばかりじゃない。というか僕が異常なだけだ。

きっとみんな受け入れられないだろう。

慈悲の無い世界

二次元とは違うのだから。

「きつと、、みんなに言つと離れてしまつ。」

顔色が変わった。

泣き方も変わった。

僕の心はキンと痛む。

それ以上の痛みが彼女にはあるハズだ。

僕は、、

彼女の両肩に手を置き、

「僕は全て受け入れる。年齢がなんだ。僕は友達であり続ける。」

なんて熱血キャラなんだろうか。

上條さん以上ではないだろうか？

なんてね。

偽善者みたいになってしまったが、僕はそいつのは関係ないと思うのだ。

ただ単純に。

その後色々な話をした。

予想以上に話が合った。

彼女の心は僕と同じ15才のようだ。

たかが出会って一日

生活が激動した。

いや、、、高校生活っていつのはこついつものなんだろう。

僕、今を渡る（前書き）

すごく遅くなりました。

本当にすいません。

今から沢山更新します

僕、今を渡る

翌日。

僕は高校生活二日目を過ごす。

今日はキタムラレイと話す機会はなく、なんだか寂しく感じた。

寂しく感じること事態が不思議だ。

まあ友達ってそんなものかな。

放課後、当たり前のようにトウタと帰る。

すると前から女子高生がこちらに指を指しながら走ってきた。

元クラスメート。

僕は嫌な汗が出てくるのを感じた。

「トウタじゃーん久しぶり、、あつ、ワカイくんも久しぶり、、」

「よお。まだ1ヶ月も経ってねえけどな。」

トウタは応える。

僕は会釈をするだけ。

そこから二人は話し込む。

だから僕は。

「用事があるから」

なんて嘘をついて帰る。

なのに、

「はぁ？今日はお前ん家に遊びに行く約束じゃねえか。」

と、トウタの空気読めない最低の言葉が聞こえた。

まて、、、

実際、腹立つ。

「考えろよ！僕は空気を読んだの！今、空気担当だったけど空気を読んだの！僕がいたら気まずくなるだろ！わかれよ！」

普通に怒った。

「え？」

「逆に、え？」

「は？」

「いや、言葉を変えれば応えてくれるシステムじゃないし！」

「わけわかんねーよ」

「えっー！？何？トウタの頭ん中って何が入ってんの？中学の時の僕の存在考えるよ、エアー担当をしたいのに、いるだけで邪魔な奴だぜ？」

「そんなこと無かったよ」

「無理しなくていいんだよ。」

「ごめんなさい。実際君の名前覚えてない。」

「なるほど。でも今、お前モテてるから良いじゃんか。」

「いや、なんでトウタそんなにカッコいいんだよ。過去をすぐ忘れられるんだよ！？いや、つかトウタは僕の気持ちわかるはずないだろ？まず、僕モテてないし。」

「確かにワカイクン顔だけは良いもんね。」

「だけはって何！？一番傷ついたよその言葉！酷い、酷すぎるよ。一人なら声出しながら泣いてるよ普通！」

かわいいだけって言われて神になった女の子もいるんだから！

噛み付かれて、髪切られて、紙食べて、神憑かれた女の子がいるんだから！

本だけだ。

「ワカイくんって意外に話すんだね。」

「え？いや、、まあ」

ラノベのお陰で口は達者だ。

「俺のお陰かな、、（照）」

「気持ち悪いし、トウタのお陰じゃないし。」

「いや、そんな真顔で言うなよ。傷付くだろう？。」

帰ろう。

本気で思った。

「ごめんなさい！ワカイくんのこと私勘違いしてたよ！」

勘違い？

「は？」

「面白い人だね。ワカイくんって。三年間同じクラスなのに会話したことがなかったから。」

三年間。

ヤバイな。

そんな彼女の名前を覚えていないなんて僕は、、

最低だ。

「勝手なイメージでうまく話せなくって、、私って最低よね。」

ああ。僕の罪悪感が、、

「本当私ってば最低！」

「いや構わないよ！僕も声をかけなかったのが悪かったんだよね、ねえトウタ？」

「なんかへんな汗出てるけど大丈夫か？」

うるせえよトウタ！

「本当にどうしたの？」

「いやいや何でもないよ。」

「体調悪そう。」

「ああ、そっかやっぱりお肉傷んでたんだ！だからちょっと味が！」

嘘だけどね。

「そ、そうなんだ、、」

「料理って大変だな、ばあちゃんがいて良かったぜ」

「うん。羨ましいよ」

「そっかワカイくんって一人暮らしだったね」

「うん」

一人暮らしというより独り暮らしのほうが合うのかな、、

「ワカイくん、、私、、今からでも友達になってくれるかな？」

え?、、

「は、はい！ワカイサクラです。15歳、最近の趣味はギターです。」

」

？を頭に浮かべる彼女。

「と、友達になるんだから一番最初に自己紹介しなきゃと思って」

「あつ。そうだね。サカミココロです。最近の趣味は、、、携帯かな？」

その後、メールアドレスを交換した。

現在の青春ポイ、、、アドレス帳3件。

トウタとキタムラレイとサカミココロ

実際携帯はね、、、買うつもり無かったんだけど。

買っていて良かったかも知れない。

ああ。因みにキタムラレイの携帯には15件ほど登録されている。

チャライ男子をも全て受け入れるキタムラレイは一日にしてそれく

らい手に入れたらしい。

キタムラレイは容易く友達が出来る容姿と性格をもっていると思うんだ。

しかし、それを妬む者も、、

キタムラレイは全然気付いてないみたいだけど、、

「んじゃまた」

「バイバイ」

こゝこはナチュラルにいこう

「まちなね」

、、

、、

「、、、、」

「僕をいつそのこと殺してくてください。」

「あははははは」

「ははは、、、、」

和んだ。

僕は社会的に死なずに済んだみたいだ。

さて、帰ろう。

話込んでしまったらしく、夕陽が沈みかけていた。

「今日、来るの？」

トウタに聞く。

「まあ、行く。」

ゲームに対する想いが強すぎんぞコイツ。と軽いジョークを交え川辺を歩いていると、一人、土手に座っている女子がいた。

明らかにキタムラレイだった。

「キタムラさん」

と叫んだのは

僕ではない。

隣のトウタ。である

キタムラレイはこちらを見て立ち、会釈して

バランスを崩し転けた。

転げ落ちた。

足腰弱っ

昨日の話聞く分には当たり前だろうけど

僕は全力で走る。

実際トウタと僕はそんなに足の速さは変わらないのに僕の方が数秒速かった。

手を抜きやがって薄情な奴め。

と一瞬思ったがトウタはそんな人間ではない。

僕以上に息を切らして走っていた。

「大丈夫？」

「痛たたです。」

萌えた。

「ケガは？」

「ちょっとだけ、、」

「み、、」

「見せて！」

トウタが割り込んできた。

心配なのか、萌えただけなのかわからないんだけど、、

「うつ、、」

膝には予想以上のケガをしていた。

まあ擦り傷だから安心だけど。

「僕ん家来なよ。」

当然のように言った。

「ナンパしてんの？」

高い声でそう言ってきたトウタを殴った。

「いいんですか？」

「もちろん。昨日のこともあるしね」

「昨日？」

トウタが不思議そうに言う。

「まあ、後で話すよ。さあキタムラさん立って。」

なんて僕はバカなのだろう。

こんなケガでも10年間寝ていた彼女には多きなケガ、そして、病
気がある彼女には「恐怖」なのだ。

「た、立ち上がれません、、」

その一言に僕は多少気付かされ、

「乗りなよ。」

おんぶのポーズをした。

戸惑うキタムラレイをトウタが促し、乗った。

背中に柔らかい感触を感じ、僕はちょっと戸惑った。

胸当たってますけど。

「俺がしたかったな」

トウタが言う。

僕の表情で気付いたらしい。

背中のキタムラレイは？を浮かべていることだろう。

兎に角、そうして、僕の家を目指した。

僕、家に彼女をよぶ（前書き）

これ書いた後、バカテス読んでびっくりしました。

僕、家に彼女をよぶ

僕の部屋。

「サク、大丈夫なのか？」

トウタが聞いて来る。

中学時代に逆戻りだろ？

と言いたげだ。

「仕方ない、、、だろ、、、」

深刻そうに言ってみる。

「全く、、、お前はどこまで、、、」

ガチャ。

あけて入る。

カチッ

電気を付ける。

僕の家。

家族用。比較的大きな部屋。

親が買ったこのマンション。

綺麗にはしてある。

「えっ、、、」

キタムラレイが驚いた口調で言う。

「だから、、、」

頭を抱えるトウタ

「これ、なかなか手に入らないやつじゃないですか！」

一番大切にしているフィギュアを指差し、キタムラレイが言う。

「は？」

トウタが驚いてる。

「頑張つて探したの。」

僕は、彼女をソファ―に座らせながら言った。

？が今度はトウタの頭についている。

「あー！私、この本買おうか迷っていて、」

「これ？これなら貸してあげるよ。はい。」

「良いんですか？ありがとうございます！」

「返すのはいつでも良いからね。」

「ありがとうございます」

「な、なんで？どうなってんの？」

トウタがポカーンとしている

「実は斯々然々で」

「いや、わからねえよ。」

必殺「斯々然々」は通用しないみたいだ。

「だから、ゝゝ」

そういうわけで昨日の出来事を話した。

一部を除いて。

「なるほどな。」

トウタは理解したらしい。

まあトウタに言うのは大丈夫だったのは解ってる。

けど、、、

なぜか、、、言いたくない。

「どうする?」

「まあ、ゲームしようぜ!」

「なんのゲームですか?」

「Wiiだよ。Wiiのスポーツゲーム」

「なるほどお！」

「キタムラさんも持っていたね。」

「はい！かなりやり込んでいます！」

「じゃ先にトウタと勝負してみる？」

座りながらも出来るから。

「じゃ俺も座つてするよ。フェアに行かなきゃ。」

「私、強いですよ？ハンデくらいないと、」

「いやぁ大丈夫さ。」

10分後。

「いやぁもう、やめてええ」

ゝゝゝ

「くはははは！まだまだあー！」

ゝゝゝ

「助けてくださいい」

ゝゝゝ

「ほらほら、だんだん大きくなってきただろう？」

...

「いやあああああ！」

...

「また入るよお、デカイ一発が！」

「バカヤロー！！！！！！！！」

僕は全力でトウタをなぐった。

「なんだよ!？」

「この健全なストーリーを18禁にするつもり!？」

「はあ？」

「わかってるよ！点差が大きくなるとか、ホームランとかわかるけど、主語を言ええ！」

単体で召喚すると卑猥に聞こえるんだよ！

「そして、キタムラさん！悲鳴がいけない感じだっ！」

「????」

ダメだ、、わかってない。

「というかタニグチくん強すぎます！」

「まあね。」

「悔しいです！サクラくん勝負してください！」

「うん、いいよ。」

10分後

「ほら、もっともつといくよ!」

「もう、無理です!」

「突いて突いて突きまくるよ!」

「こ、これ以上は無理です!」

「さあ、濃厚な一発をうちこんで、」

「バカヤロー!!」

フツと目の前が暗くなった。

「な、なんだよトウタ、」

「18禁にするつもりか!？」

なんで、、

「なんでだよ!？」

「わかれよ!剣道のゲームは主語がないとダメだ!」

僕は自ら首を、、

そんな笑い合える時間を過ごしていた。

僕は知る。彼女は休む。（前書き）

タイトルの在り方変えました。エンディングまでこんな感じでいきます

僕は知る。彼女は休む。

事件は現場で起きているんだ！

このフリーズがこんなにも有名になるだなんて、、、、

織田さんも夢にも思わなかったらう。

それは当然で、素人同然で、放つことで周りは啞然、自分ですらも呆然、見る人によりは愕然

「ちょー気持ちいい！」

「いや、もういいわ！」

僕はトウタに殴りかかる。

18禁にしようとするトウタの心意気を僕は愛という暴力で阻止せねばならない。

ピンポン

インターホンの音が鳴る。

僕は部屋に二人を残し玄関に向かう。

「はい？」

「すみません、失礼します。」

警官が二人入ってきた。

「な、なんですか？」

わけがわからない。

一人はこちらに、もう一人の警官はリビングへ向かう

「ワカイさんですね、通報があってきました。少々失礼します。」

リビングのドアの向こうからは

『まだまだ!』

『いやあ、、、助けてください』

『助けは来ないよ!』

これが原因かつ!?

「事情を、、、」

「違いますよ!?!」

「動くな!」

もう一人がリビングを開けて叫ぶ

目が点になっているトウタとキタムラレイ。

「きつとゲームしてる声を勘違いしたのだと、、、」

「、、、、いや、すっかり調べさせていたたきます。」

「なんで！？いや、ミスったみたいな顔したじゃん！ゲームかよ！
みたいな顔したじゃん！」

もう一人の警官に助けを、、

ダメだ、目が虚ろだ！

かつこよく登場したのにミスしたから恥ずかしさで虚ろになってる
じゃん！

その後、誤解は解け、キタムラレイは警察の車で家に送り届けられ
た。

なんか警官に静かにするよつに逆に怒られ、僕は警察に電話した。

勘違いで入ってきて部屋を荒らすとはどういうことだ？と。

イライラは収まらないけれど仕方ないので諦めた。

翌日。

キタムラレイは休んだ。

理由はわからない。

その次もまたその次の日も休み、土曜日。

僕は電話を試してみた。

「キタムラさん？」

「サ、サクラくん、、どうしたんですか？」

「休んでいるからさ、大丈夫かなって？つーか僕らの所為かなって。」

「いいえ！違いますよ！」

「どうしたの？」

「だ、大丈夫です。」

明らかに大丈夫じゃない。

心配になった。

「今から会えないかな？」

「へ？」

「会いたいんだ君に。」

「良いですけど、」

「じゃ一番最初の川辺で。」

「はい。」

心配だから会いたい。

心配だから会いたい、、ただ会いたい。

心配する理由は？

友達だから

秘密を教えても大丈夫であろうトウタに教えない理由は？

わからない。

いや、わかる。

天の邪鬼さ僕は。

15分後、川辺で待っていると、キタムラレイがきた。

当たり前。かつ、平然に。

何も変わらないキタムラレイ

目の下にくまが出来ているくらいだろうか。

「大丈夫？」

「ええ。」

「どうしたの？」

「えっ？じ、実は、、サクラくんから借りた本にはまりまして、、」

「そうなんだ。」

笑いながらいう。

あーなんだそんなことで休んでいたんだ。

良かった良かった。

心配する必要なってなかったじゃないか。

無意味。

「んで本当は？」

心配する必要なってなかった。

それが本当なら。

明らかに嘘をついてる。

「なんでですか！？」

「僕、間違ったやつ貸したもん。君が持つてるやつだし。」

警官がきたから焦ってミスったんだよね。

「まあ心配するほどのことじゃありません。」

「病気が悪化したんじゃ、」

「いや、大丈夫ですよ。」

「それなら良かった。でもどうして？」

「か、風邪ですよ。あはは。」

「月曜日は？」

「行きます。」

「良かった良かった」

甘い人間は世界では時に残酷だ。

僕はのような人間は残酷だ。

月曜日。

キタムラレイは来た。

男子一同キタムラレイに集まる。

「大丈夫？」

優しい言葉だなあ

でも身体が欲しいだけなんだろう？

言うねえ。僕も。

汚い人間だなあ。

僕は三次元に美しさを求めない。

友達の心が読めてしまえば皆、一人。

きつと、自分が思ってることと他人が思っていること。

同じようなことなのに汚く、酷く、残虐に見える聞こえる

それを知るべき。思い知るべき。

それでも。そうだとしても他人を馬鹿にする人間は

僕は嫌いだ。

僕は無力。彼女は泣く。

放課後。

心配だったため、トウタと共に、キタムラレイと帰ることにした

けれど、

「ちょっと用事がありますので」

と言われた。

途中までトウタと帰っていたけれど僕は忘れ物をしてしまった。

という口実で学校へ戻った。

なんか嫌な予感がしたのだ

僕はそんな予感がよく当たる。

ドアの外から僕は中を確かめ、入らずに話を盗み聞きした。

「俺は幻滅だよキタムラさん。みんなを騙すなんて」

性格の悪そうな声。イイヌマだっけ？

「べ、別に騙してなんか、、」

「年齢詐称でしょ？」

バカだ。コイツ。

彼女は一度も15歳とは言っていない。

詐称はしていない。

「私は、、騙してなんて」

「これ、キタムラさんだよな？兄貴の友達から借りただけだよ。」
そう言って取り出した卒業アルバム

「わ、私です、」

「これ、みんなに言っべきだよね？」

「え、」

「言いたくない？ならいいよ僕は黙っとしてあげるよ」

意外といいやつなのかな？

「俺の言うことを聞けばね。」

最低野郎だ

「どっちがいいかなー。俺の言うことを聞いて一緒に楽しむのと、みんなに嘘つき呼ばわりされて三年間辛い思いで過ごすのか」

「う、」

「さあ、答えは？」

「両方NOだ」

僕は教室にはいった。

なんで人間はこうなんだろう。

悲しくなる。

「お前、どこから聞いてた!？」

「全然聞いてないよ。」

「どこからだ？」

「俺は幻滅だよ。からかな」

「最初からじゃねえか!」

「あっそうなの?」

どうでもいい。

「おい。お前あんまり調子のるなよ」

目を吊り上げて僕に言うてくる。

「どっちだよ。」

「ああん？」

「調子のってんのはどっちだっていつてんだよ。クソヤロー」

僕は本気でキレていた。

そんなことは知らずイイヌマはケンカを吹っ掛けてくる

「おい、ちょっとちやほやされてるからって調子乗んなよ。」

「はあ。気持ち悪い。性欲に踊らされて女の子に脅迫だなんて人間

のクスだね。」

「女なんて性欲の処理道具なんだよ」

高飛車に笑う。

「気持ち悪い。吐きそうだ、ゲスだね君は」

「偽善者が！黙ってやがれ！」

「喋らないで唾が飛ぶ」

「うぜーよ！バーカ」

「というか息を吸わないで、お前のような虫けら以下が地球の酸素を吸って二酸化炭素を吐き出す自体が迷惑だから」

「ああ！？」

「いや、君も頑張って光合成する力くらい手に入れたら？存在自体迷惑なんだからちよつとは役にたちなよ。」

「ふざけんな！」

殴りかかってきそうになったところで

「まさかケンカをしてるんじゃないだろうな？」

先生が入ってきた。

「い、いえしてません！」

イヌマはそのまま逃げ帰った。

「大丈夫？」

「、、、歳が10歳上だと学校に来ちゃいけないのでしょうか？」

「、、、」

「みんなに10歳上だっって言わないようにするためにはそれなりの代償を払わないといけないのでしょうか？」

「、、、、」

「彼に何がわかるんでしょうか？」

泣きながら言うキタムラレイに僕は何も言葉をかけれない。

何て言えばいい？

何て言えば彼女を救える？

上っ面だけの綺麗な言葉をだらだら語ればいいのか？

見てきた空想世界の言葉を引用するればいいのか？

そんな物、、すぐに剥がれ落ちちゃいそうだ。

だけど、僕は言える言葉がある

僕は言いたい言葉がある。

僕だけの言葉だ

泣いている彼女に僕は

10歳年上の人生の先輩に僕は

言ってあげることが出来る

「僕と一緒に帰ってくれませか？」

「、、、、え？」

「そして、僕ん家でゲームをしよう。トウタと三人でさ。」

「、、、、」

「僕らは、ほら友達だろ？友達つてのは隣にいろべきなんだよ。どんな時も。」

「、、、、よろしく願います」

涙をぬぐいながらそういうキタムラレイ。

僕にはどうしたらいいかなんてわからない。

でも友達ってのが遊ぶってのはわかる。

だから。僕はそう提案した。

夜9時まで遊び、送り届けた。

僕はキレル。彼女未知。

翌日。

学校へ着くと心配していた事が起こっていた。

「来たぞ！お出ましだ！」

イイヌマが一人盛り上がっている

「キモヲタのサクラくんだ！」

みんなが僕を見る。

まだ、キタムラレイとトウタは来てない。

「朝から五月蠅い奴だなあ。」

「キモい、キモいよサクラくん」

騒がしい奴だ。

ヲタクキモって考えが古い。

「ねえまだ来ないのかな？君の友人のおばさん。」

「おい！あんまり調子に乗るなよ。くそ野郎。」

「うわあ、キモヲタが大声でした！」

こいつを黙らせないといけない。

「キモヲタ？ああ僕はヲタクだよ。だから何？ヲタクであっても君より人間として出来ていると思うね」

「キモいから話さないでくれるかな？」

こいつは語彙力がないなあ

「うん。確かにキモい。僕はキモい。でも君にはキモさじゃ勝てないよ。」

「うるせーんだよ！なんだよマジでキメエ！てめえあの鯖読み女の事が好きなんだろ？」

「ああ、言われてみれば好きかも知れないな。」

「ハハハハ！お似合いだよ！25歳の嘘つき最低女とキモヲタのお前とか！最高にお似合いだよ！」

「最低女？何言ってるんだよ。まず、彼女は年齢を言ったことがない。その時点で嘘はついてない。あと彼女は性格としても最高だ。病気と10年戦ってきた強さと、辛さをしているから優しさを兼ね備えている。」

「、、、、」

「玉に傷なのは、異常なほど天然ということだね。ただ僕には萌え要素として好きなのところの一つだけだね。」

「キメエ、、、、」

「さっきからキモいしか言わないね。語彙力がしょぼすぎるんじゃないや」

ない？」

「ヲタクのくせによ、あんまり調子にのんじゃねえよ！」

殴り掛かってきた。

でも、僕は小さな時から一人だったから、自分の身は自分で守れるように、合気道を習っていた。

どのくらいって？

小学生の部で優勝したくらいさ。

全国で。

流れるようにイイヌマを投げ飛ばした。

痛がるイイヌマ。

「おいおい。ダサイよ君。」

「くそつくそおお!」

「君は人を見下しすぎだ。さあて、、素晴らしいプレゼントあるんだ」

「あ?」

僕は携帯をとりだし、動画を再生する。

「ちょっと待ってね」

早送り

、、、乗んなよ。』

『はあ。気持ち悪い。性欲に踊らされて女の子に脅迫だなんて人間のクズだね。』

『女なんて性欲の処理道具なんだよ』

「聞こえたかい？聞こえたね？」

「、、、、」

「なあ、、どっちが最低だよ！」

「くそっ！」

走って何処かにいつてしまった。

僕も胸くそ悪くなったので帰った。

何故人は他人を見下したがるのか？

いや、どーでもいいや。

きっと明日からは誰も話し掛けて来なくなる。

中学時代と変わりない。

それが当然だったんだから

むしろ、一人のほうが気楽で良いや。

なんて思いながら帰っていると

「よお！ワカイ！」

昔の同級生に出逢った。

心底だるかった。

めんどくさい。つーかなんで中学時代は話し掛けて来なかったくせに、、、

「ひ、久しぶり、、、」

「ああ、、、どうした？なんかあったのか？」

「実は、、、」

まあ、イライラしたこともあり一部、キタムラレイのことを伏せて話した。

「お前、ヲタクだもんなあ」

「う、あっさり言われると怒れなくなる

「う、うん」

「いやでも、顔は整ってるし優しいよ。」

「優しくなんかないよ、」

「、、、、中学時代のお前って話し掛けないでオーラをだしてたよな」

「は？」

よく意味がわからない

「そりゃ、お前がヲタクだから話し掛けて来ないやつもいただろうけどよ、俺や俺の周りの奴らはそのオーラで近づきにくかったんだぜ？」

「僕はそんなオーラを？」

「しかしよお、今あつたら全然そんなことねえじゃん。」

「、、、、うん、、、、」

「変わったな。お前。」

「そうなのかな？」

「ああ。そうだ。」

「そっか。」

よくわからないけど、若干すつきりした。

「あとよ、、、荒川アンダーザブリッジ持ってる？」

「うん。」

「貸してくんねえ?」

「いいよ。」

「じゃ俺、学校あるからよ、帰りにメールするわ」

「僕のメアド知ってるの?」

「いや、知らねーよ。でもココロと同じクラスなんだけだよ。この前、お前からメアドもらったって喜んでたからよ」

成る程、、

「喜んでたっ!?!」

「ああ、お前のこと知らないクラスメイトに自慢してたぞ。」

「そっか」

複雑な気持ちだ。

「あ、あと、、はがないも貸して」

「わかった」

いや、なんでマニアックな略しかたを、、

その後、僕は帰宅し一日中寝た。

起きて、携帯を見たら

メール新着405件

着信315件

「どこの戦場ヶ原さんだよ!」

思わず叫んでしまった。

僕は迷う。彼女は迷惑。
(前書き)

受験勉強って大変ですね

僕は迷う。彼女は迷惑。

メールはトウタ

電話はキタムラレイ

正直怖かった。

優しさが迷惑に変わる瞬間だろうね

だって途中からトウタのメールとか空メだもん。

というかメール押し出されてけされてるからね。

おい、(^ _ ^) /

ってメールしかなかったからね。

いじめられてる感じがする。

どうしようか、

学校行くのが鬱だあ。

返信するのさえも鬱だ。

なんて感じだけど、

仕方ないだろ。

ごめん寝てた、(^| ^) /

と2人に返しておいた。

現在夜の7時

明日、学校行くか、

冷やかな目

ひそひそ話

思い出してしまう。

でも、、僕の思いすぎなところもあったと言われたしなあ、、

でも、前と今回は違う。

今回はブラックだ。

正直怖い。

と、、その前に、、

しまった、、

本貸す予定だった。

トウタのせいでメールが、、

探さなきゃ、、、

無い、、、

聞かないと

その後、午後8時位に色々な物を貸した。

喜んでいる姿を見て良かったと思う。

部屋に戻ると携帯が鳴っていた。

「はい。」

「サク、、、お前バカだなあ」

ゲラゲラと笑うトウタ

「仕方ないよアレは」

「まあナイスだよ。」

「そうかな？」

「ああ。あつ、明日は気兼ね無く学校に来い。」

「え？」

「んじゃまた明日。」

プーッ

よく意味がわからなかった。

まあいいか

ただ、、キタムラレイの電話には出ることは出来なかった。

鳴り止まない携帯を僕は何故かずっと握りしめていた。

翌日普通に学校へ向かった。

寝ることが出来なかったから早く行くことにした。

結局キタムラレイの電話には出ることが出来なかった。

今は話をしたくない。
本当にごめんなさい。

とメールを送って、返信を見て閉じた。

教室の窓から外を眺めた。

空に雲一つない。

朝日が僕を指す。

イイヌマは来るだろうか？

クラスメイトとどんな顔で接すれば良いのだろうか？

そんな不安で心臓のあたりが痛い。

「はあ。」

「どうしたのワカイくん？ため息なんかついて、幸せ逃げちゃうよ？」

不意に声を掛けられ、、、、というか声を掛けられ僕は驚いた。

「こ、コグレさん、、、、」

僕に声を掛けてきたのは友人のササヌキさんとともに来た、コグレさんだった

「何でこんな学校来るの早いの？」

「昨日は寝れなかったからね。」

「あれ？あんなかつこいいことを言っておいて意外と引き摺るタイプ？」

ササヌキさんから言われた。

「いや、帰宅してそれから寝てたら夜寝れなくなったただだよ」

ちよつと意地を張った。

「そうなんだ。つかワカイくんってアニメ好きなんだね。」

「うんまあ、、、、」

「今期のアニメで面白いのってなんだと思う？」

ササヌキさんから意外な一言。

わけがわからなくなった

「え？」

「実は私達もアニメ好きなんだよね」

コグレさんが言ってくれた。

「そ、そうなんだ。」

「だから、ヲタクをバカにしたイイヌマくんにガツンと言ったワカイくんに感謝してる！」

「え？」

いや、、展開が、、

「うちの彼氏、ヲタクだからさ」

成る程

「ワカイくんおはようー！」

「おっす！ワカイ！」

一度も話したことなかったクラスメイトが僕に挨拶してくれる。

続々と、、

どうしたのか

いやどうしたもんか

「おはようございます」

一人一人に頭を下げたので

「ここはレストランかつ」

「俺は先輩かつ」

「私はお嬢様？」

「お前は機械かつ！」

なんて突っ込みがきた

しかし、なんでレストランなんだろう？

ちよつとなんでレストラン？

いらっしやいませじゃない？

ツツコミがボケになってますけど

天然という枕詞を必要とするボケになってますけど

まあいいや

とりあえず僕は状況が聞きたかったのでトウタを待つことにした。

僕は知る。

わいわいとクラスが盛り上がっている。

僕はこの状況が理解出来ない。

何故だろう？

昨日まで大して仲良くなかった人々が話をしている。

「おっすサク！」

やっとトウタが来た。

「おはよう。というかこの状況何！？」

「おー、、、知りたがりなサクくん。」

意味がわからない。

「おはよう。というかこの状況何？」

「今の一連の流れをなかったことにしようとするな。まあ斯々然々で、、」

「なるほどアニメ好きが多かったり、優しい人間ばかりだからか！」

「いや、なんで斯々然々で伝わったんだよ！？」

推理を話してみたのだけれど意外に合っているらしい。

今日のトウタはボケが激しい。

しかもツルツルのボケだ。

スベリ散らしている。

、、別に僕は、僕がこのクラスで空気担当になってしまふことはあまり感心がない、、なんて言えば嘘だけれど、一番心配だったのはキタムラレイのことで、トウタのボケにかまっている余裕なんてなかった。

「キタムラさんはどうなったの？」

トウタに恐る恐る聞いてみたら

「あー、、、まあ、、、お前は悪く無いよ、、、」

と意味深に深く沈んだ顔でそう言った

胸がきゅーっと苦しくなる。

可哀想。

こんな言葉では表すことの出来ない気持ち

今までこんな気持ちがあっただろうか？

なかった気がする

そう、、、

そうか、、

自分より不幸な人間なんていないとどこかで思っていたんだ。

世界で一番不幸だっと思っていた。

だから、わかったような口調で慈悲をかけて話しかけてくる人間に
対して心を、、自然に、、いつの間にか、、閉ざして、、

そうか、、

キタムラレイ、、

彼女の泣き顔を思い出す。

僕はなんで昨日帰ってしまったんだろう。

電話をしなかったんだろう。

誰よりも一番傷付いているのは彼女だろうか？

いい加減不幸ぶるのはやめろよ、

そう、、、そうだろう？

僕は幸せだ。

「トウタ、、僕キタムラさんに会いに行く！」

「やめとけ」

「なんで!？」

「いいから、、」

落ち着いた口調のトウタに怒りを感じる

「でも、、」

「でもじゃねえんだよ!」

トウタが叫んだ

「だつて僕の所為だろ？」

怯むことなく僕は一矢報いるように言う

「あー、、、そうだよ。なんでお前は俺にキタムラさんのことを言わなかった？ ああ？ 全部お前の所為で彼女は、、、」

話してる最中、一人の男子生徒が

「並べ！」

と叫んだ

と同時に男子が二列に並んだ。

なんか花道的なものを作つて、、

「おはようございます!」

息をあわせて男子が大きな声で言う

その花道をキタムラレイは一人一人にペコペコしながら歩いていた

「お前の所為だろ! あんなキタムラさんがみんなのアイドルになったのは」

笑いを堪えられず吹き出したトウタ

????

「、、、?」

「彼女は優しい。お前が言った言葉だろう? そんな人を嫌うなんてあり得ない。寧ろ萌える。」

「、、、」

キタムラレイは顔が真っ赤。

そりゃ恥ずかしいだろうね

ああ、、よかった。

「おはようございます！サクラくん！」

たつたと僕の机の前に駆けてきた彼女は緊張しているようだ。

「うん、おはよう。」

僕は自然を装いながら返す。

「ありがとうございます」

「何が？僕は別に何もしてないよ。」

「かつこっけんなって。」

トウタに頭を小突かれた

「うるさいなあ、」

「本当にありがとうございました！」

「いやだから別に僕は、」

彼女は相当頑固なのかもしれない

「頭を上げてよキタムラさん。」

僕は耐えきれず言った。

「、、」

「無視ですかっ!？」

「サク、、、言っべき言葉があるだろう」

「ど、どういたしまして？」

「サクラくん、私、高校生になれて、君に、この
クラスみんなに出逢えて本当に幸せでした。」

「何！？もう一年終わった感じ？」

という突っ込みたい衝動を抑えて、

「僕もだよ」

この日

僕は不幸ぶった自分が嫌いになった。

僕はいつも誰かの所為にしていた。

それは間違いだった。

そうか

中学時代の自分

結局僕の所為だ。

あの事があってもなくても自分は誰かと絡むのはしなかったろうし、
、、

あー、、、

「でたでたこいつの悩んでる顔。最高潮に悩んでるぞ」

「わ、私のことですか？」

「ウチに彼氏がいるって知ったからよ」

「イイヌマくんのこと？」

それぞれが口にする

「なんか一人だけおかしい！」

「レイちゃん、自意識過剰よ。」

ササヌキさんがいう！

「いや君ですけどもっ!？」

「あら?。」

「あらじゃねえ!。」

トウタもつつこむ。

「はははは」

笑いが起こった。

でも、僕は知らなかった。

いや知る由なんてなかった。

こんなに笑える日々が、、

僕は歌う。(前書き)

第2章

にはいった感じです。

受験まであと二ヶ月なんですよね。

ヤバイヤバイ

第2章では

過去をテーマにやっていくつもりですが気まぐれで何仕出かすかわかりません。

こんな稚拙な小説ですがこれからもよろしくお願いいたします

僕は歌う。

入学して早々起こった色んなことはあっさりと解決した。

1ヶ月が経ち

このクラスは雰囲気が良いまま
音楽発表会の曲を今現在決めている

「super cellが良いと思う」

「いやここは冒険でしょでしょ?」

「でしょって言い過ぎたらわかんないでしょ?」

「儚くも永久のカナシがかっこよくてよくない?」

「じゃ哀しくも親にタカリでよくない?」

「痴音ミクネタをだしてくんじゃねーよ!」

「じゃ、むしょくさまで」

「痴音はもういいよ！」

「じゃ、、、DAYBREAK・S BELLで」

「お前にそんな歌唱力があるのか？俺はない！」

「じゃendscapeで」

「いやどんだけ難しい曲をチョイスしたいんだよ」

「フラ・プールとか？」

「まあ歌い易いけど、、、」

僕はこんな話を聞きながら

supercellはOKでフラ・プールはダメなのか

何故●が必要なかわからない。

L・Arc〜en〜Cielも大丈夫

flu●poolはだめ

いや作者の気分次第なのだけど

「けいおん！の曲をやろう！」

「いや他のクラスにどん引きされるだろ」

僕は立ち上がり

「supercellのさよならメモリーズにしない？」

と言った。

鶴の一声

と自分でいうのもなんだけど

それに決まった。

歌い易く、素敵な歌だから。

その日から練習を始めた。

正直、歌唱力には自信がある。

まあ井の中の蛙的考えかも知れないけど。

アコースティックギター片手に家でも練習する。

そういえばキタムラレイさんは歌はどうなのかな

練習、、、

この1ヶ月僕の家は何度か来ている。

友達として、、

ほとんどトウタも一緒。

2人きりというのはない。

当たり前だけどね。

泊まっていったこともない。

トウタはかなり泊まる。

そんな話をしてみたけど僕は彼女を練習しようなんて2人きりで、、
家に呼ぶつもりなんてない。

なんてない。は嘘だ。なんてチキンだから出来ない。

なんか、、キタムラレイのことが好き見たいじゃないか

違うよ。

彼女のことが心配なんだ。

悩んでないかな？

なんて。

翌日。

「良い感じだよ。合っている！」

「合うとこんなに気持ち良いんですね！」

「いいよ！もっと、もっと僕を感じて！」

「はい！」

「さあ！一緒になろう！」

「気持ち良いです！」

「いくよ！いくよ！？」

なんでこんなことになったんだっけ、、

ああ。

「今日サクラくんのお家にいつでも構いませんか？」

ってキタムラレイがいったからか。

「いいよ」

「あの、、トウタくんは呼ばないで、、いやというか他の人も呼ばないでください。2人つきりをお願いします」

「えっ、、？」

そしてさっきの状況。

「いくよ、、1、2、3、4」

「サクラが咲くよ見慣れた、」

キタムラレイがかなりの音痴なので練習をしているというわけ

勘違いをした人がいるなら一言言わないといけないね。

これは健全な小説だよ。

彼女は声はかなり綺麗だ。

nagiさんに負けないくらい

しかし、、リズム感が、、

まあだいぶ合ってきてはいるのだけれど。

完璧に合ってさらにのびのびと歌えている時は鳥肌が立つくらい素晴らしい。

きっと彼女はそういう才能があるんだろう。

「おっと、、もう日が沈みそうだ。帰る準備をしなよ。送っていかから。」

「は、はい、、」

本当に彼女は僕の10歳上なのだろうか？

嘘なくらい、、アレだ、、

しっかりしてない。

ここまで来ると演技としか思えない。

さとう珠緒並みだ

と疑ってしまう自分のことが嫌いになる。

「サクラくん今悩んでいますね？」

「え？」

「だいたいわかるようになりました。サクラくんが悩んでいる時の顔」

「、、、、なんだか複雑な気分だね」

「なんでですか!？」

「まあ気にしないで」

「気にします!」

「うーん。嬉しいような恥ずかしいような」

悲しいような申し訳ないような、、

「恥ずかしいですか?」

「うん。僕はあんまり人と接してないからね。こんなことは初めてなんだよ。」

一人も同然だった。

誰にも言わない。過去がある

誰にも言えない。過去はある

それがどんなに親しい人でも

それがどんなに好きな人でも

それがどんなに愛する人でも

そんな過去は誰にもある。

「私はもっとサクラくんのこと知りたいです。」

「え？」

「もっと仲のよい友達になりたいです！」

そういうことね。

「うん。なるう。なれるはず。」

「じゃまずは音楽祭頑張りましょうね」

「ビシバシと鍛えるからね覚悟してよね」

「はい！」

そんな会話に華を咲かせていたらあっという間にキタムラレイの家についてしまった。

「じゃあね」

軽やかにさよならを投げ掛けた

「さよ、ゝゝ、あっ！」

「どうしたの？」

「音楽祭終わったら打ち上げしましょうね」

「うん。」

音楽祭、、学校行事で人生初楽しみだ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0637t/>

お金で、僕は幻想の、彼女は現実の青春を買う。

2011年11月15日19時28分発行